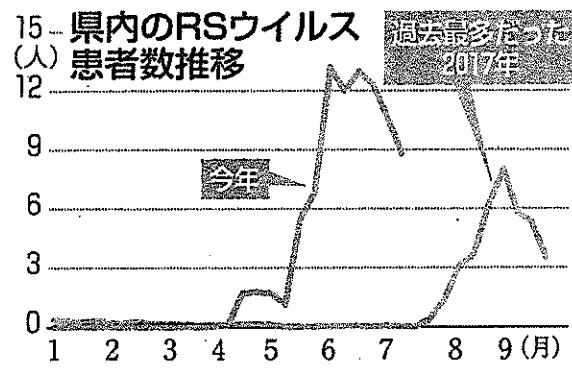


7/27 制

RSウイルス 県内猛威

6月の患者数過去最多



乳幼児に肺炎を引き起す」ともある「RSウイルス感染症」が、全国的に流行している。福井県内でも先月の患者数が、データを取り始めた二〇〇三年以来過去最多を更新しており、県小児科医会の笠原善之会長は注意を呼び掛けている。

RSウイルス感染症は、急性の呼吸器感染症で乳幼児に多い。国立感染症研究所によると、生後一年間で50~70%以上三歳までにはほぼすべての子どもが感染する。主な症状は、せきや発熱。熱は二、三日、せきは一一週間続く場合が多いという。

笠原会長によると、乳児や未

熟児などは、肺炎や脱水症状になる」ともある。感染は、ひまつや接触から。再感染する」ともあり、「一度かかったからといって油断せず、しっかり予防を。家族に感染者がいる場合は、高齢者との接触を控えて」と呼び掛ける。一方で、同シンズンに再感染する」とは、ほとんどないとされる。

乳幼児に肺炎 小児科医会長が注意呼び掛け

県内二十三定点医療機関（小児科）からの報告患者数をまとめた「県感染症発生動向調査」によると、一定点医療機関当たりの過去最多の患者数は、二〇一七年九月の八・〇〇人。しかし二二年第二十三週（六月七一三日）は二三・一七人と大幅に上回った。それ以降も八人以上と高止まり状態が続いている。

例年は秋から冬に流行。二〇一六年はコロナ禍で外出を控えたり、保育園が休園するなどしたため、RSウイルスの感染者が少なかった。

笠原会長は「かぜの症状と似てるので区別は付きにくいが、熱が出たり、せきがひどかったりした場合はためらわずに受診してほしい」と話している。

（山口育江）